

ミツバチ減少 関連指摘の農薬

国産蜂蜜から検出

日本など各国で広く

使われ、ミツバチ減少との関連が指摘されているネオニコチノイド系農薬の一部が市販の国産蜂蜜中に残留していることが、河野公栄愛媛大農学部教授らの研究チームの分析で、

明らかになった。

人は蜂蜜を食べる量が少ないため健康に問題がない濃度とみられるが、ミツバチへの悪影響が否定できないレベルという。河野教授は「ミツバチが長期間にわたって蜂蜜を摂取

した場合の影響について、詳細な検討が必要だ」と指摘している。

研究チームは市販十種類の蜂蜜で、ニテンピラムやアセタミプリドなど七種のネオニコチノイド系農薬の濃度を調査。アセタミプリ

ドが全ての蜂蜜から検出され、最高は一ミリ

当たり五・九ナノグラム(ナノは十億分の一)だった。ニテンピラム、チアクロプリド、チアメトキサムも一部から検出され、最高はチアクロプリドの同十六ナノグラムだった。

約二分の一に達すると結果となった。すぐに死ぬことはないとしても、何らかの悪影響が懸念されるという。

「蜂蜜は多くの農薬について残留基準が決まっているが、今回検出された農薬の個別の基準値はない。ネオニコチノイド系農薬は、ミツバチが大量にいくなくなる「蜂群崩壊症候群(CCD)」との関連が欧米で指摘され、日本国内で金沢大のグループが、比較的低濃度でCCDに似た現象が引き起こされたとの実験結果を報告している。

影響調査が急務

山田敏郎・金沢大教授の話 ネオニコチノイド系農薬の残留基準値は、蜂蜜では定められていないため、国が

決めた一律基準の〇・〇一ppmが適用される。今回、検出された濃度はこの値の五分の一以下なので、国の基準から判断すれば、通常の影響では人間の健康には問題のないレベルだろう。だがミツバチにとっては、かなり濃度が高いので影響が懸念される。詳しい汚染実態やミツバチへの影響の研究が急務だ。



ネオニコチノイド系農薬

タバコに含まれるニコチンに似た物質を主要成分とする農薬の総称で、1990年代から殺虫剤などさまざまな用途で使われる。神経の働きを阻害して昆虫を殺す。

各国で多発するミツバチの大量死や消滅との関連が指摘され、欧

州連合(EU)の欧州委員会は5月、クロチアニジン、イミダクロプリド、チアメトキサムの3種の農薬を、12月から当面2年間使用禁止にすると決めた。農薬メーカー側は「科学的な結論が明確になっていない中、多くの反対を顧みずに実施され行き過ぎた」と反発している。

得られたデータを基に、ミツバチへの影響が特に大きいとされるチアメトキサムの生涯摂取量を試算すると、短期間に摂取した場合にミツバチの半分が死ぬ量(半数致死量)の